

目本保育学会会観

2017年9月1日 発行編集·発行 一般社団法人 日本保持会

JAPAN SOCIETY of RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION

●第169号●

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-2 B,RロジェT-1 Tel 03-3234-1410 Fax 03-3234-1414 http://jsrec.or.jp

●特 集●

第70回大会レポート (於:川崎医療福祉大学)

日本保育学会第70回大会は、2017年5月20日(土)・21日(日)の日程で、川崎医療福祉大学(岡山県倉敷市)をメイン会場にして、「あらゆる子どもに保育を」をテーマに開催され、4,077名の参加者でした。節目の大会を振り返り、今後の日本保育学会の未来を展望するという意味で、会報169号のテーマを「第70回大会レポート」と設定しました。

第70回大会を終えて

第70回大会実行委員長 橋本 勇人

2017年5月20日・21日、川崎医療福祉大学をメイン会場として開催された日本保育学会第70回大会(中国・四国ブロック主催)は、「あらゆる子どもに保育を」を大会テーマとして、口頭発表314件・ポスター発表734件・自主シンポジウム49件と、史上最高の4077名の参加をいただき、無事終了することができました。本大会に関係したすべての皆様に、心より感謝いたしております。

思い起こしてみると、3年前、中国ブロックの髙橋 敏之理事からお話をいただいた時は驚天動地でした。 しかし、日本保育学会の会員の多くを占める「地方の 養成校の頑張りを少しでも見てもらいたい」という思 いと、法人理事長の判断もあり、清水の舞台から飛び 降りる気持ちでお引き受けいたしました。

大会のテーマは、小田豊先生のご指導を受けた川崎 学園の保育者養成が、「通常の保育・幼児教育に加え て病児・病後児・発達障がい児の保育」を特徴として いたこと、私自身が社会福祉の出身で、中園康夫先 生・佐々木正美先生の下で学んできた当時のノーマリ ゼーション原理の「あらゆるものを包み込み柔らか さ」を表現したかったことから、保育の原点の「あら ゆる子どもに保育を」としました。「すべて」より「あ らゆる」の方が、一人一人を大切にしている思いが伝 わると考えました。この時点では、「基調講演」と、 「要領・指針の改訂の年なのでしかるべき人にお願い すること」だけが決まっていました。

それからの約1年間は、大会企画と運営方法を思い悩み続けました。「できないこと」ではなく「強み」に注目すること、愚直に「大会テーマ」「企画内容」「運営方法」を一体として伝えていくこと、学会である以上後世からの批判に耐えられるものとすること、そのためには今までのすべての人間関係を使おうと決めました。

「強み」は、日本保育学会には多くの人材がいるこ

と、要領・指針の改訂の年であること、学科内に15名の日本保育学会員がいること、卒業生に研究者がいない代わりに手塩にかけた174名の公立幼稚園・保育園の保育者がおり、今も精神的に繋がっていることでした。また、当時の秋田喜代美会長、小川清実副会長、戸田雅美副会長らから、多くのご助言いただけたことも財産でした。

2015年夏の前会長による会場視察では、「保育現場 と一体となってね」「ブロック、特に岡山県らしさや、 川崎学園らしさも出してね」「コンパクトがいいわ」と アドバイスをいただき、またご登壇をお願いした際 は、「one of themでね」と囁かれました。これらを受け て、歴代会長にご登壇いただいた「70周年記念シンポ ジウム」や、川崎学園らしい「あらゆる子どもシンポ ジウム」などの企画案を決め、汐見稔幸会長、戸田雅 美副会長、大豆生田啓友副会長、髙橋敏之理事らとも 相談しながら進めました。また、運営面でも、会場を コンパクトな川崎医療福祉大学中心に変更し、「岡山 県下すべての保育者養成校からなる実行委員会」を組 織し、「保育現場と地方行政までを巻き込んだ大会」と するよう心がけました。最後の勝負は、「地方の保育 者養成校」として手塩にかけて育てた卒業生・在学生 を信じることでした。

この間、講師の先生方には、私どものような浅学非才の者のお願いを聞いてくださるのか不安を持ちながら懐に飛び込みましたが、「選ばれし者であるが故に、人生をかけてきたことを、後世に伝えなければならない」という使命感と迫力を学ばせていただきました。大会終了後、誰もいなくなった会場で、教員・スタッフの卒業生と学生は、こみ上げてくるものを抑えることができず、皆で号泣しました。本当にありがとうございました。

日本保育学会70周年記念シンポジウム 日本保育学会70年の歩みとこれから

若月 芳浩

川崎医療福祉大学にて記念すべき日本保育学会第70回大会が開催された。日本保育学会70周年記念シンポジウムは、歴代会長である第6代会長の小川先生、第7代会長の秋田先生、そして現会長である第8代会長の汐見先生が共に登壇する機会であった。このシンポジウムは大変貴重な機会であるだけでなく、これからの保育の方向性や課題を歴史的にも明らかにする重要な時間であった。

戸田副会長の司会で進められたシンポジウムは小川元会長の語りからスタートした。日本保育学会の歴史から過去の会長のエピソードを語り、現在の日本保育学会に対する期待を以下の視点から強調された。「保育学としての学問的確立」「少子化、子育で支援などの現代的課題解決」「保育者養成としての質的向上、専門性と地位向上と待遇改善」。これらを解決することが保育学の使命であるとのことであった。更に今後の重要課題として「保育者養成実践学」の形成、「集団に入った子どもが幸せに過ごすことの形成、「集団に入った子どもが幸せに過ごすことの形成、「集団に入った子どもが幸せに過ごすことの影響として真剣に取り組む時に来ている。この課題をどのように解決するか、秋田前会長、汐見会長に問いたのことであった。

小川元会長の発言を受けて秋田前会長は、少数の子どもを対象としていた時代から大量保育の時代としての課題は、正に知と技のプロフェッシ子化・しての新たな力量が問われると共に、少子化・その新たな力量が問われると共に、少子化・その方向性を定めることが重要な時代の流れである。そのために「保育学講座」の出版、「放射取りれる。そのために「保育学講座」の出版、「放射取りれる。そのために「保育学講座」の出版、「放射取りれる。そのために「保育学講座」の出版、「放射取りれる。そのために「保育学講座」の出版、「放射取りれる。第5代会長の津守先生、第6代会をあい川先生の思いを受け継ぎ、生涯を通しているとを磨くことの重要性と密接に関係しているとのことであった。

会長になって1年を迎える汐見会長は、日本保育学会の課題として以下の点を提示した。①研究内容・方法の偏りを克服すること、②子どもの発達に関する研究の裾野を広げること、③近代社会を前提とした教育・保育研究からの脱皮、④幼稚園・保育所の二系統克服のための教育・福祉の新たな統合、⑤保育学のプロパーとして、臨床学としての意味を鮮明にすること、などを取り上げ、教育・保育としての学問的な成立が重要な課題であることを強調された。

3人の先生方の提案からディスカッションが始まった。

小川元会長からは臨床の知として現場にどのような支援が可能であるか、この点が保育学としてしまる。保育学は臨床の意見があった。保育学は臨床、新学であるとの意見があった。保育学はして、新学の世界であるが、学問的などを日本保育前の会員と共に創造していくことの必要性が秋た時間で、そして汐見会長から語られた。とはなかった。議論が全て解決の方向に向かうことはなかった。議論が全であった。

●Profile

若月 芳浩 (わかつき よしひろ) 玉川大学教育学部 教授 四季の森幼稚園 園長 障碍のある子どもの保育研究や実践を中心に保育の質的向上を目指す。

実行委員会企画シンポジウム 日本の保育内容の歴史と展望

一幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型 認定こども園教育保育要領の歩みとこれから—

三浦 崇司

実行委員会企画シンポジウムでは、教育・保育要 領の改訂内容についての説明と議論が交わされた。

無藤先生からは、中央教育審議会委員の立場から、 今回の改訂について日本の教育施設における教育の 在り方を統合するものであり、幼稚園、保育園、認 定こども園の3歳以上児の教育を国の指針として同 じにするものであるということが述べられた。また、 今回の改訂で追加された「幼児期の終わりまでに育 ってほしい姿」について、年長児の後半までに完成さ れるという意味ではなく、育ちの方向性が示されて いるということが強調された。

汐見先生からは、保育所保育指針の改訂について、乳児保育、3歳未満児保育の充実が語られた。3歳未満児でも5領域に合わせて独自の視点を持ち、養護という大きな枠組みの中で、個別の領域だけではなく、領域を跨いで「ねらい及び内容」が作られていることを示した。また、養護の大事さも述べられ、乳児期の生命の営みが首尾よく行われるような配慮を目指すことが養護の観点であるとも述べられた。

渡邉先生からは、幼保連携型認定こども園の立場で今回の改訂について、実際の現場での課題や子どもの生活にどのように照らし合わせていくのかという視点で様々な意見が述べられた。保育現場では、認定こども園となったことで、幼稚園と保育園で、「教育」「保育」「養護」など、共通に使える言葉とそ

うでない言葉が存在することや、2歳児クラスから 3歳児クラスへの進級時は、幼保小連携と同じくらいの段差があり、そこをとても丁寧に捉え、引継ぎをする必要があること、集団生活の経験年数の違いや園内での生活時間が長くなることからの、子どもの24時間を考えた計画性を持たなければならないことなど、認定こども園の保育現場としての課題が投げかけられた。

3人の話を受けて大豆生田先生は、内容と問題を整理し、一つは「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(=10の姿)は方向性と捉えると語られたが、実際の現場では、どのように活用していくことが想定されるのかという問題と、もう一つは1・2歳児が3歳以上児につながる「教育課程」というイメージなのか、それは具体的にどういうことなのか、という問題の二つが3人のシンポジストに投げかけられた。

このシンポジウムを聞いて、「子どもの生活をいかに豊かなものにしていくか」ということを改めて、3歳 ていく必要があると感じた。国の指針として、3歳 未満児の生活の大切さ、3歳以上児の「育っててこれからこそ、保育現場も原点に立ち返り、子どもの「今」と「これから」を見据えてに立ち返り、子どもの「今」と「これから」を見据えてに立ち返り、子ども園ではよる保育時間のを担合では、家庭環境による保育時間のでのなども園での生活とない。とのというによって、園での生活とならによって、園での生活とならによって、園での生活とならによって、最近によるのを記された。そのことが確認された。そのことが確認された。そのことがではい今、保育の質が問われているのだと考える。

●Profile

三浦 崇司 (みうら たかし) 認定こども園みどりの森 保育教諭 日々の保育実践から見える子どもの学びについて興味があり、主にプロジェクト型保育の実践から研究を行っている。

自主シンポジウム JA 3 認定こども園における 保育カンファレンスと保育の質

―長時間保育の中で保育者の「対話」をいかに生み出すか―

髙橋 雄貴

このシンポジウムでは、認定こども園として保育の質を上げるための、職員カンファレンスの持ち方、質の向上につながるカンファレンス方法を問題提起者がそれぞれの立場から発表した。

最初に、柿沼平太朗氏(認定こども園こどもむら)より理事長という立場から「対話」を生み出す為の環境作りについて話した。当園は、支援センターや小規模保育など様々な機能を持ち合わせた施設である。その中で、職員の異動も活発に行い、結果、職員の専門性も上がり「対話」が活発になった。また、保育者が子どもとのノンコンタクトタイムを作る為の配置(午睡中専門の職員、看護師等)を整えたり、会議の場を設定したらそこに出られる職員が参加したりするなど、それぞれの立場に合わせて「対話」できる場を作っていた。

次に、木村創氏(認定向山こども園)より副園長と いう立場からどのようなカンファレンスを持つと 「対話」が起こり、保育の質の向上につながっていく のかを事例を用いながら話した。木村氏はカンファ レンスにファシリテーターとして加わっているが、 事例をもとに保育の質を向上できるカンファレンス とそうでないカンファレンスの話も上がった。例え ば、保育の中でねらい(目標)はあるものの、やるこ と(行動、活動)優先の話し合いをしていたが、ファ シリテーターがなぜそれをやるのかを確認すること で再び「対話」が生まれた。そして、スモールステッ プのねらい(目標)を持つことで保育者同士の試行錯 誤が起き、「対話」も活発になり保育の質の向上につ ながった。また、フリー会議(主任級の保育者の会 議)でカンファレンスのことを話し、保育をチームの こととして考えていた。

次に田島大輔氏(文京区立お茶の水女子大学こども園)より現場にいる立場から物理的条件(ノンコンタクトタイムを作る、時間創出)を整備し、ツール(ドキュメンテーション)を活用した「対話」方法が紹介された。クラス2人担任制で、ツールがあることで「対話」が生まれ、共通のイメージを持てるとされた。また、田島氏は第三者的視点の取り入れ方ととで「対話」が生まれ、共通のイメージを持てるとされた。また、田島氏は第三者的視点の取り入れ方ととで「対話」が生まれ、共通のイメージを持てるとされた。また、田島氏は第三者的視点の取り入れ方ととで「対話」が上げるなど、自らの積極的行動によって1日の保育の中での「教育課程に係る教育時間」と「午後の保育」との「つながり」と「違い」を生み出そうとしていた。

指定討論者の高橋健介氏(東洋大学)からは、認定こども園として多機能ゆえの難しさ、ファシリテー

ターの引き出す役割、第三者的視点をどう入れるか、 共通イメージをどう持つか、が話題に上がり意見が 交わされた。

今後、認定こども園として多機能化することで、 地域とのかかわりが生まれ、地域の支援、そして地 方創生の一役を担う存在となりうるが、それぞれの 園に合わせた(地域に合わせた)取り組みが必要とな るだろう。また、保育の質を上げるための「対話」の 生み出し方、ツールの取り入れ方も課題となってい くだろう。

最後に、認定こども園の長時間保育の中で「教育課程に係る教育時間」と「午後の保育」で独自性と連続性をどう生み出すか可能性広げられたシンポジウムであった。認定こども園が子育て支援、地域支援をしていくことで地域が元気になる、そのような取り組みが今後増えていくことを願う。

Profile

高橋 雄貴 (たかはし ゆうき) 認定こども園あかみ幼稚園 保育教諭 4年前から「午後の保育」の担当となり、認定こども園における「異年齢保育 のカリキュラム」構築に向け保育現場に立っている。

口頭発表 KD12 多文化教育・異文化理解・ジェンダー など 2

野澤 祥子

今大会のテーマは「あらゆる子どもに保育を」であった。多様な背景を持つあらゆる子どもを含んだ保育が求められる中、多文化・多言語環境で生きる子どもたちの保育も大きな課題のひとつである。この課題について、現在、どのような実践や研究が行われているのかを学びたいと思い、口頭発表KD12の分科会に参加した。

まず、江藤明美氏(鈴鹿大学短期大学部)はA市の取り組みの現状を報告した。A市では、異文化で暮らした経験のある外国人コーディネーターが外国籍園児を支援している。自己体験に基づきながら子どもに寄り添い、保護者・子ども・保育者の架け橋になっているという。

次に大庭三枝氏(福山市立大学)は、福山市立F保育所とフランスの保育学校との交流実践を報告した。特に印象的だったのは、「平和アピール展」へ出展する作品を5歳児が描いていた際に、「世界中の子どもたちが手をつなぐためには、日本人だけではなく外国の友達を一緒に描かないといけないこと」への気づきが子どもたち自身から発せられたというエピソードである。交流体験を通じて、文化多様性への感受性が育まれていくことが示されている貴重な実践報告であった。

品川ひろみ氏(札幌国際大学短期大学部)は、スウェーデンのストックホルム市内・近郊での、多文化保育の現状について報告した。子どもを取り巻く言語環境を図示する「ワードバンク」の作成や、iPad・ポスター・掲示物などを活用した多文化的保育環境の構成など、日本の保育においても参考になる多様な実践が紹介された。

渡部晃正氏(東京家政大学)からは、外国籍の人が 12%を占めるS区での取り組みが報告された。S区 では「日本語サポート指導」や「通訳派遣」を実施し ているという。そうした行政の支援を活用して外国 語版や総ルビ付きの園だよりを作成している区立 A 幼稚園の事例など、精力的な実践事例の報告がなさ れた。

保育の中で、多様な文化的背景を持つ子どもたちにどう対応するかを具体的に考えることは無論大事である。一方で、個々の文化を尊重しながらも将来・生涯を見据え、多文化共生に向き合う社会のあり方までを議論しながら、より広い視野で多文化保育を構想していくことの重要性についても考えさせられた。

●Profile

野澤 祥子 (のざわ さちこ)

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター

保育の質とそれを支える保育者の専門性に関心を持っている。 保育者の経験知・実践知を、多様なアプローチを用いて可視化・共有化する ことを目指している。

実践者や自治体等の協力を得ながら、さまざまな分野の研究者との共同研究を進めているところである。

ポスター発表 PA13 保育方法(保育方法論・保育形態・幼 児理解)など 1

上田 よう子

5月20日にPA13の分科会で行われたポスター発表 について報告をする。

「幼児の本質的な育ちを支える保育者のあり方VIII」と「IX」は、それぞれエピソード記録と「生活・あそびのあしあと表」から保育を振り返る研究で、緻密で真摯な研究の積み重ねによって自身の保育の振り返りだけでなく、子どもの振り返りにも使用しているところが興味深かった。今後研究に参加してみたいと思う園や研究者にも分かりやすいものであり、保育そのものの向上を目指そうとする丁寧な研究に、研究者としてこうありたいと刺激を受けた。

「5歳児の創造性を育む音探求の試み―手作り楽器の音描写・音会話に着目して―」は、絵本の導入から聞き取った音を画用紙に描写する試みの中に、子どもの感性や好奇心を育む「保育の専門性」が見られる事例研究であり、発表を聞いている人達も子どもたちの表現や研究の面白さに惹かれる内容であった。「大学の中にある保育園のこころみパートII―大学と連動しての保育者の成長―」もまた、大学からの研究者や専門家による保育の実践を行い、子どもの力を育んでいく研究であったが、連携を超えた連動の良さを伝えた事例研究であった。

「新任保育者の2歳児への言葉がけに関する意識変容プロセス―日記を用いた自己エスノグラフィより―」は、日記から保育の現場での言葉がけに関する試行錯誤や心情の変化を可視化し分析した研究で、新人の重圧や焦りがリアルに描かれていた。言葉がけを変えるきっかけとなった分岐点の設定の難しさや

可能性について研究者と意見交換をしながら、新人だけでなく周りの保育者の助言や対応など保育全体を見つめ直す機会にもなるのではないかと感じた研究であった。「外国につながる子どもを捉える保育者の見方―言葉をめぐる保育者の行為と語りを手がかりに―」では、日本語が話せない子ども自身の個性や主体性を保育につなげていくまでに至らない保育者たちの姿を発話と身体に着目した捉え方に分類してあるとの研究と「保育における性の対応」の研究では保護者を巻き込んでいく必要性を強く感じた。

「4歳児と1歳児のかかわり合い (2)」の事例研究では、散歩の写真から、異年齢のかかわりの良さと、1歳児に同じ視線で寄り添う4歳児らしい姿を大切にする保育観が表現された。「幼児を対象とした自尊感情尺度の開発に向けて一保護者と保育者がもつ『自尊感情が高い子どもイメージ』の比較一」では、保育者の子どもへの期待や保育観が含まれた結果が出ており、「自尊感情を育てる」保育とは何なのか研究意欲の湧く研究であった。

そのほかにも遊具や導入などに着目した研究発表がされた分科会であったが、中でも「子どもの学び」「子どもの主体性」をどのように育んでいくかということに着目した研究が多かったことが興味深く、自分でも取り組んでみたいと刺激をいただく学びの機会となった。ポスター発表ならではの沢山の意見交換や悩みの共有がなされ、次回の大会が楽しみになる時間となった。

lacktriangle Profile

上田 よう子 (うえだ ようこ) 和泉短期大学児童福祉学科 助教

子どもの自尊感情を育む言葉かけに興味を持ち研究しながら、子育て中の世代が地域で居場所を見つけるための実践的なフィールドワークを行う。